様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １９ 日現在

機関番号：３３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2017
課題番号：１５Ｋ０２９６０

研究課題名（和文）ヨーロッパ中世都市リモージュの宗教組織のメディア戦略の進化についての研究

研究課題名（英文）Evolution of media strategy in medieval Limoges

研究代表者
小野　賢一（ONO, KENICHI）

愛知大学・文学部・准教授

研究者番号：３０７３９６７８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の課題は、ヨーロッパ中世都市リモージュの二つの宗教施設（サン・マルシアルとサン・レオナール）が、どのようなメディア戦略を行い、人々に訴えかけようとしたのかを、教化政策を分析することによって、具体的に解明することであった。研究の成果として、先行研究では看過されてきた改革文書を用いることによって、1030年代の神の平和の時期は、マルシアルの広報的活動が圧倒的に優位であったが、1060年代に入ると、レオナールの広報的活動が成功し始めることが明らかになった。つまり両者の戦略を時系列に捉えることに成功した。マルシアル修道院のメディア戦略において重要な『ヴァレリア伝』の刊本の欠落箇所を復元した。

研究成果の概要（英文）：This research concentrates on the political aspect of media strategies in Limoges by investigating two religious facilities of this medieval city (that of Saint Martial Abbey and Saint Leonard collegial church). This is concretely clarified through the analysis of pastoral policies. It was viewed that the period of the peace of God in the 1030s was the important period in public relations (PR) activity of Saint Martial Abbey. Using the reform documents of the monastery and the collegial church, which had been overlooked in previous studies, in the 1060s, however, it became clear that the PR strategies implemented by the church of Saint Leonard had begun to find success. This study was able to grasp both strategies in a time series. It was found that a mixed-media strategy, combining hagiography and reform documents was adopted. Finally, the missing part of the publication of Hagiography of Valeria, which was an essential part of the media strategy of Saint Martial Abbey, was restored.

研究分野：史学、西洋史、ヨーロッパ史

キーワード：西洋史　ヨーロッパ中世史　教会史　修道院　聖人伝

１．研究開始当初の背景

(1)アメリカの研究者Ｒ．ランデスは、ヨーロッパ中世最大の平和運動として知られる「神の平和運動」の研究に精力的に取り組んでいる。彼の一連の論稿によって、神の平和運動と、運動の中心舞台となったリモージュ市に所在するサン・マルシアル修道院のメディア戦略の関連性が明らかとなった。同修道院が展開した、聖マルシアルに使徒の地位を付与しようとする宣伝、すなわち聖人伝等による宣伝活動は、平和運動の維持という現実の問題とかかわっていた。また、その宣伝活動の成否が、民衆からの支持あるいは人心掌握の度合いと密接に関連していた。そして、使徒性を付与しようとする宣伝の失敗にもかかわらず、さらなる宣伝活動によって、宣伝があたかも成功を収めたかのような記録を後世に残した。この記録の史料批判が十分に行われることなく後世に受け継がれ、サン・マルシアル修道院は西南フランスで最も権威ある宗教組織と看做されるようになった。

(2)平和運動の舞台となったリモージュ市には、サン・マルシアル修道院とは別に、もう一つの教会組織が存在した。サン・マルシアル修道院のライヴァルとも言える、司教座とサン・レオナール参事会教会である。ところが、こちらのメディア戦略については、ほとんど知られておらず、まとまった研究もない、というのが現状である。

２．研究の目的

(1)ヨーロッパ中世都市の宗教組織の聖人伝などを用いたメディア戦略について共同研究を行う。中世都市では行政組織と宗教組織がしばしば重なっていた。キリスト教は何故ヨーロッパ中世都市に受容され、支配的な力を持ったのだろうか。申請者は各宗教組織が覇権を掌握すべく、様々なメディアを駆使して競争し、その競争の過程で各宗教組織のメディア戦略の技術が練磨されたからであると予測している。

(2)従来、個々の研究者が 1 種類の聖人伝だけを検討してきた。本研究では同一都市の 2 種類の聖人伝を、それぞれを専門とする申請者と連携研究者が各自の個別研究の蓄積を援用し比較検討する。宗教組織が都市を支配するために聖人伝を用いた宣伝合戦を展開することで人心掌握と統治の技術が向上したことを 2 種類の聖人伝史料とそれらの各時代の異本の時系列の比較により動態的に把握する。

３．研究の方法

(1)両宗教組織のメディア戦略は中世の全期間（特に十字軍運動期、百年戦争期）を通じて行われるが、今回の共同研究では 11 世紀の神の平和運動期に焦点を当てて、都市リモージュの修道院側の聖人伝史料（『聖マルシアル伝』）と司教座側の聖人伝史料（『聖レオナール伝』）を比較検討し、それぞれのメディア戦略の特色を明らかにするとともに、都市リモージュを舞台に展開された宣伝戦の具体的な状況を明らかにする。

(2)聖人伝だけでは十分に解明できない状況については、年代記や公文書（教会文書集成など）を補助資料として用いて、歴史的背景や当該都市の政治構造を分析しつつ、研究をすすめる。これらの資料はリモージュ、パリで入手した。また中世都市の支配者の教会のメディア戦略が神の平和運動の期間の前後でどのように変化していくのかという点についても探る。

４．研究成果

(1)宣伝戦を最初に仕掛けたのは、サン・マルシアル修道院であるが、この修道院の広報的活動の段階的な発展状況が確認された。カロリング期に編纂された聖マルシアルの最初の伝記『ウィタ・アンティクィオール』は、マルシアルとペテロの関係を強調するものであったが、あまりに簡略な内容であるため、宣伝効果は限定的であることが推測された。次に 10 世紀末から 11 世紀初めに編纂された『ウィタ・プロリクシオール』と呼ばれる聖マルシアルの伝記が編纂される。こちらは十分に練り上げられた内容であり、1030 年頃の神の平和運動期にアデマール・ド・シャバンヌは、その内容を発展させて使徒継承性を主張する論争を展開した。本研究ではアデマール以前の重要な広報的活動の転換点に特に目を向けた。『ウィタ・アンティクィオール』と『ウィタ・プロリクシオール』という二つの聖マルシアル伝の陰に隠れて目立たないが、実は両者を繋ぐ 10 世紀に編纂された『聖ヴァレリア伝』こそが、広報的活動の成功による聖マルシアル崇敬の発展において画期を成すものであり、当該地域の最大の世俗権力であったアキテーヌ公権力を支持者として取り込むうえで、欠かせないものである点が明白となった。時系列に聖人伝の構造を分析することによって、詳細かつ具体的な記述が付加されていく様子から、世俗権力に対する広報的活動のプロセスが解明された。『聖ヴァレリア伝』は、このように重要な史料であるが、マルシアルの伝記の傍流として看過され、校訂版にも問題があった。『聖ヴァレリア伝』のパリ写本については、刊本に欠落箇所が存在する。その個所を写本に基づき復元した。

(2)広報的活動の変化については、上述の 10 世紀段階の聖人伝による変化、先行研究が豊富な 1030 年頃のアデマール・ド・シャバン

ヌの説教に基づく変化、十字軍時代の奇蹟録による変化について、ある程度解明されているが、当初の研究計画の神の平和運動前後の時系列の変化を探ることは、従来先行研究で用いられてきた聖人伝、説教、年代記、奇蹟録といった類型の史料だけでは解明することが困難であることが、研究を進めるうちに明らかになった。そこで、発想を転換し、サン・マルシアル修道院の改革文書とサン・レオナール参事会教会の改革文書を比較検討することとした。両文書とも 1062 年に発給されているが、これは偶然ではなく、都市リモージュにおいて権力構造の変動があったのではないかという仮説を立てて研究を推進した。その結果、1030 年代の神の平和運動期に編纂された両宗教組織の聖人伝と 1062 年に編纂された両宗教組織の改革文書を時系列に比較することによって、都市の権力構造の変動に基づく広報的活動の変化を探ることに成功した。両宗教組織ともにお互いを意識し、都市の権力構造の変動に合わせて、複数のメディアを使い分ける戦略（メディア・ミックスの戦略）を駆使して、緻密な広報的活動が行われていることが明らかになった。両宗教組織の宣伝内容には、1030 年頃のマルシアル修道院のカロリング的秩序に基づくアキテーヌ公権力の強調に対し、サン・レオナール参事会教会のメロヴィング的秩序に基づくフランク国王の権威の強調、1060 年代のマルシアル修道院のグレゴリウス改革期の秩序に基づくペテロ、ローマ教皇、クリュニーの権威の強調に対し、サン・レオナール参事会教会の神の平和の秩序に基づく、キリスト、アキテーヌ公の権威の強調という広報的活動上の明確な対立軸が存在することも確認された。

(3)新興のブルグス型城郭を支配するサン・マルシアルの修道院都市と、古代ローマの管区が起源のキウィタス型城郭を支配する司教座都市の両方を合わせて都市リモージュは構成されている。つまり中世都市リモージュは 2 つの円形の都市城壁によって明確に分かれていた。研究史上においても、これまで修道院側の『聖マルシアル伝』と司教座側の『聖レオナール伝』にかんする個別の実証研究をそれぞれ独自に積み重ねられてきた。メディア戦略という両宗教組織の立場・主張・利害が最も強く反映される分野の比較検討を通じて、今回初めて、その両系統の研究の総合・一本化に成功した。それによって、2 つの宗教組織が相手の出方によって刻々とメディア戦略を変えていく動態的状況を異なる時期に編纂された文書の時系列の比較によって、当時の人々の刻々と移り変わる心性を動態的に捉えることができた。

なお年度末の研究代表者の緊急手術入院によってやや遅れがちになった『聖レオナール伝』及び『サン・マルシアル修道院改革文書』の構造を解析した結果を整理した論考が逐次刊行される予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 8 件）
①小野賢一、〔書評〕杉崎泰一郎『修道院』、査読有、西洋史学、査読有、265 号、2018 年
②小野賢一、古典を撫でる：アクタ・サンクトールム、リンガ、査読無、愛知大学語学研究室、2018 年、15－16
③小野賢一、11 世紀中葉の聖レオナール崇敬と聖堂参事会の改革、愛大史学―日本史学・世界史学・地理学―、査読無、第 26 号、愛知大学文学部人文社会学科歴史・地理コース、2017 年、53－68
④渡邉浩、聖ヴァレリアの伝記 3 章～5 章、キリスト教文化研究所紀要、査読有、17 号、2017 年、93－99
⑤小野賢一、〔書評〕藤崎衛『中世教皇庁の成立と展開』、西洋史学、査読有、259 号、2016 年、62－65
⑥小野賢一、回顧と展望ヨーロッパ中世（一般）、史学雑誌、査読有、第 124 編第 5 号、2015 年、312－313
⑦小野賢一、回顧と展望ヨーロッパ中世（西欧・南欧）、史学雑誌、査読有、第 124 編第 5 号、2015 年、313－317
⑧小野賢一、中世盛期の南フランスにおける司教座聖堂参事会の律修化と教皇権―類型学的アプローチの重要性―、青山史学、査読無、第 33 号、2015 年、43－47

〔学会発表〕（計 10 件）
①小野賢一、12 世紀のプランタジネット朝と教会、イギリス児童文学研究会、2018 年
②小野賢一、21 世紀の十二世紀ルネサンス論：教会史の視点から、西洋中世学会、2018 年
③小野賢一、プランタジネット朝期の教会と社会、名古屋歴史科学研究会、2017 年
④小野賢一、趣旨説明：帝国と魔女で読み解くヨーロッパ、愛知大学人文社会学研究所講演会、2017 年
⑤小野賢一、中世アキテーヌ地方の統治構造と教会、キリスト教文化研究所例会、2017 年
⑥小野賢一、趣旨説明：国境を越える歴史学、愛知大学人文社会学研究所ワークショップ、2016 年
⑦小野賢一、ヨーロッパ中世都市リモージュに於ける宗教組織のメディア戦略、キリスト教史学会大会、2016 年
⑧小野賢一、西洋中世史研究の動向、土曜会、2016 年
⑨小野賢一、アキテーヌ地方におけるアンジュー・プランタジネット家と教会、キリスト教史学会大会、2015 年
⑩小野賢一、人文諸学のなかのヨーロッパ中

世史、愛知大学人文社会学研究所開設記念シンポジウム 、2015 年

〔図書〕（計 3 件）
①小野賢一編、国境を越える歴史学、愛知大学人文社会学研究所、2018 年、44
②小野賢一、〈帝国〉で読み解く中世ヨーロッパ ―英独仏関係史から考える―、朝治啓三、渡辺節夫、加藤玄編、ミネルヴァ書房、2017 年、376
③小野賢一、人文知の再生に向けて、愛知大学人文社会学研究所、伊東利勝編、2016 年、257

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
小野　賢一（ONO,Kenichi）
愛知大学・文学部・准教授
研究者番号：30739678

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
渡邉　浩（WATANABE,Hiroshi）
藤女子大学・文学部・教授
研究者番号：70326528

(4)研究協力者
（　　）